ユネスコ研修活動概要報告書

大阪大学大学院　人間科学研究科
博士後期課程 1 年　山口菜々果

文部科学省の「ユネスコ研修プログラム」の研修生として、2025 年 11 月から 2026 年 5 月までの 6 ヶ月間、ユネスコ東アフリカ地域事務所（在ケニア・ナイロビ）に派遣されています。当事務所は、ケニアを含む東アフリカ地域 13 カ国を管轄し、総勢約 60 名のスタッフが働いています。教育、文化、自然科学など、分野ごとに 6 つのセクターに分かれており、その中でも私は人文社会科学（Social and Human Science：SHS）セクターを主軸としつつ、教育（Education）セクターにも所属しています。

SHS セクターでは、“Transforming MEN’talities”というプロジェクトに従事しています。本プロジェクトは、各地域の男性らしさの規範や、それに起因するジェンダー被害の実態調査、ジェンダー平等に向けた男性の参画を促す啓発イベント等を実施し、最終的に政策提言を行うことを目指しています。これまでの活動では、地方への現地調査に同行し、行政職員や NGO、地域住民へのインタビューを実施したほか、イベント運営におけるロジスティクス調整、アンケート作成、メディア向けの記事やレポート執筆など多岐にわたる業務に携わりました。ポジションに関わらず個人の裁量が大きく、特にインタビューやレポート作成の際は、これまでの調査研究の経験を活かし主導的な役割を果たすことができました。一方、年明け以降は、米国の各種国連機関や条約からの脱退通告という事態に直面しました。これに伴い、プロジェクトの予算凍結や職員の雇用継続困難に見舞われ、セクター内では代替予算確保やプロジェクトの再編に向けた議論が連日行われています。現場の混乱を目の当たりにする中で、一国の政治状況が国連システム全体に及ぼす影響力を実感しています。



写真 1. メインエントランスの様子


写真 2. 地方現地調査にて

コミュニケーション方法や仕事の進め方の違いに困難を感じることも少なくありませんが、文化や言語が異なる環境下でいかに円滑に意思疎通ができるのか、その方法を日々試行錯誤しながら学んでいます。また、政策的インパクトや多様な関係者とのネットワークの強さなど、国際機関独自の強みを感じる一方で、手が届きにくい地域や層に対する草の根組織や研究機関の重要性も再認識しました。本研修を通じて、日々の業務における意思疎通といったミクロな側面から、国際協力の構造といったマクロな側面まで、相互依存的な国際社会の仕組みを多角的に捉えられる、大変貴重な経験が得られています。